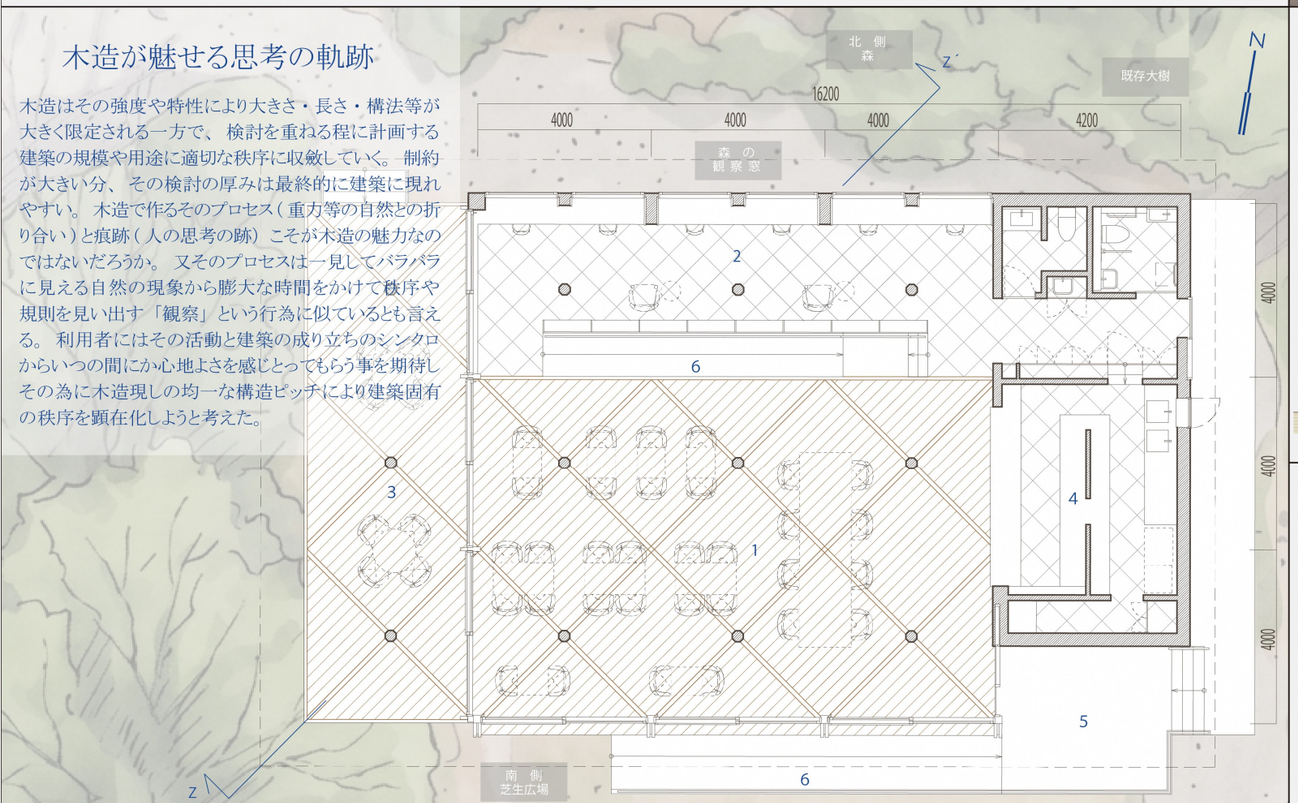


連傘の木陰（れんさんのこかげ）

日差しや雨風から守る傘を連結した木陰のような木造建築。 京都府立植物園内カフェの将来的な建て替え計画案である。 植物園のカフェはある種特殊な場所である。 それは疲れを癒す休憩所でありながら森を眺めて過ごすリビングであり観察を目的に来た人にとっては観察対象を検討する準備室であり観察した対象を調べたりスケッチをする図書館でもある。 多様な目的に応えるには特定の機能に縛られない矩形の一室空間かつ活動の選択肢が広がる半屋外のある場所が相応しいと考えた。

木造が魅せる思考の軌跡

木造はその強度や特性により大きさ・長さ・構法等が大きく限定される一方で、 検討を重ねる程に計画する建築の規模や用途に適切な秩序に収斂していく。 制約が大きい分、 その検討の厚みは最終的に建築に現れやすい。 木造で作るそのプロセス（重力等の自然との折り合い）と痕跡（人の思考の跡）こそが木造の魅力なのではないだろうか。 又そのプロセスは一見してバラバラに見える自然の現象から膨大な時間をかけて秩序や規則を見い出す「観察」という行為に似ているとも言える。 利用者にはその活動と建築の成り立ちのシンクロからいつの間にか心地よさを感じとってもらう事を期待しその為に木造現しの均一な構造ピッチにより建築固有の秩序を顕在化しようと考えた。



1／100 配置図兼平面図

用　途	飲食店	耐火構造	その他構造	区域区分	市街化区域	1	客席
階　数	地上 1 階	屋　根	アルミニウム亜鉛めっき鋼板（不燃材）	敷地面積	238000 ㎡	2	図書閲覧可能席
軒　高	5,920 ㎜	外　壁	杉板貼	建築面積	242.40 ㎡	3	テラス席
最高高さ	7,827 ㎜	軒　天	珪酸カルシウム板	延床面積	234.00 ㎡（テラス含）	4	キッチン
構　造	木造	開 口 部	下部引違＋上部 FIX	内装制限	緩和：告示 251 号ニ（自動火災報知＋スプリンクラー）	5	アプローチ
基　礎	RC べた基礎					6	スロープ



開放自然

植物園内という周りに建物が無い敷地特性を活かす為、高い天井と三面開口から外部の自然へ視界が抜ける建築とした。傘を連結したようなトラスによりその開放性を構造的に実現しようと考えた。開口部の引戸からは風と音も取込む事ができる。利用者は傘の中から外を見るような安心感を感じつつ、まるで外の木陰にいるような開放感で自然環境を楽しむ事ができる。



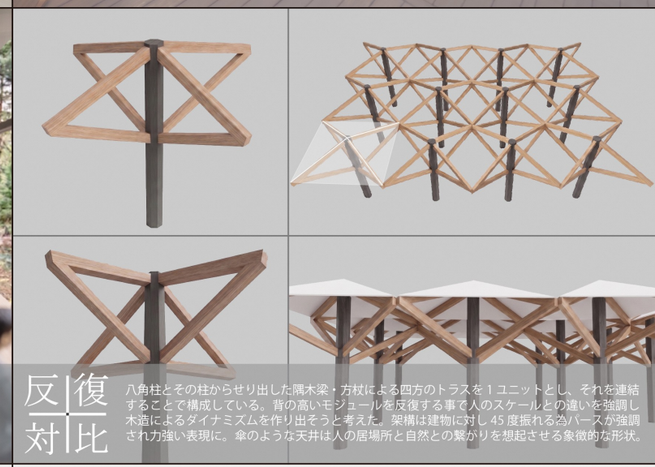
活動拠点

植物園の利用者は様々である。散歩、写真撮影、花や緑の鑑賞を目的とした一般来園者。学習や教育に利用する教育者と生徒。観察、研究、調査に利用する専門利用者。観光等の旅行者。多様な目的と広大な敷地での活動には休憩や準備が必要である。休憩後の再散策の準備や調査の合間の調べ物、観察スケッチ等、カフェという機能にとどまらず活動の拠点として機能する。



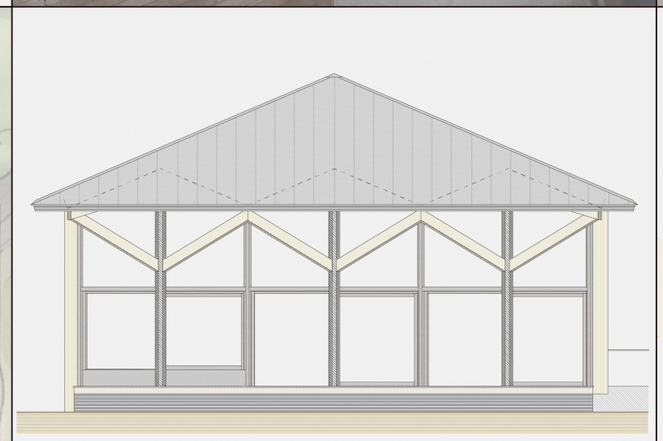
表裏二面

敷地の南側は芝生の大広場、北側は森である。南側は開放性を強調した「動」の空間に対して北側は本棚で仕切り床を下げた土間のような趣の「静」の空間。北側は書籍や企画展示により植物についての情報に触れる事ができるようにし机は席ごとに大きな窓を設える事で森を観察できるようにした。静かに森の自然に目を向ける。観察者としての利用者の為の場所でもある。

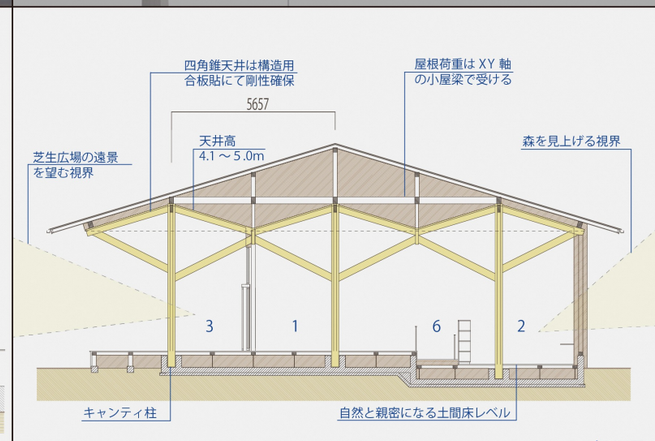


反復対比

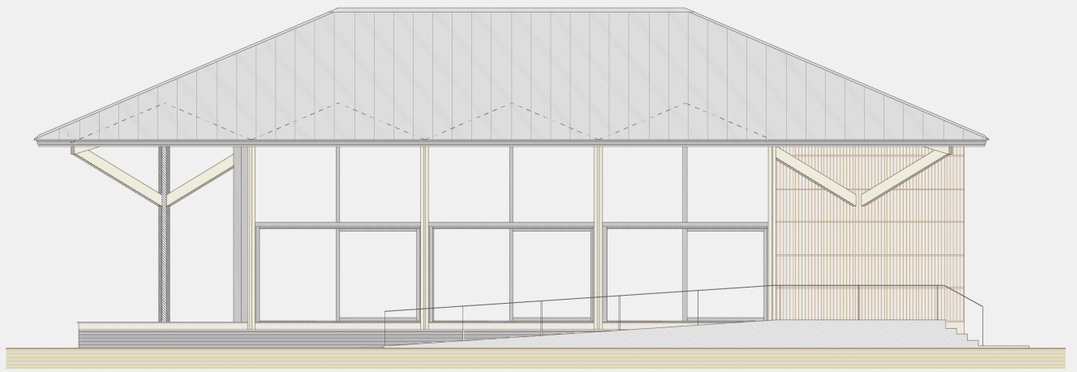
八角柱とその柱からせり出した隅木梁・方杖による四方のトラスを 1 ユニットとし、それを連結することで構成している。背の高いモジュールを反復する事で人のスケールとの違いを強調し木造によるダイナミズムを作り出そうと考えた。架構は建物に対し 45 度振れる為パースが強調され力強い表現に。傘のような天井は人の居場所と自然との繋がりを想起させる象徴的な形状。



1／100　西立面図



1／150　Z-Z´ 断面図



1／100　南立面図